

目的の無いプランクトン観察を通じて感じたこと

誌名	日本プランクトン学会報
ISSN	03878961
著者名	坂田,明
発行元	日本プランクトン学会
巻/号	50巻1号
掲載ページ	p. 21-23
発行年月	2003年2月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



3) 目的の無いプランクトン観察を通じて感じたこと(寄稿)

坂田 明

〒335-0001 埼玉県蕨市北町4-4-30

Miscellaneous thoughts through my hobby of keeping and watching water fleas

AKIRA SAKATA

4-4-30 Kitamachi, Warabi, Saitama 335-0001, Japan

E-mail: daphnia@nifty.com

URL: <http://homepage3.nifty.com/sakata/>

Abstract A jazz musician is “A” side of my life, and an amateur aquarist of water fleas is my “B” side life. I enjoy keeping them in my home aquaria and watching them through a microscope. I was so struck when I observed for the first time the life system of this tiny creature through the transparent carapace under a microscope. Through this hobby, miscellaneous thoughts occur to me including a question what is life for water fleas and for human beings. It appears that water fleas always play their own roles in the aquatic ecosystem to support our life. Do we human beings play our own roles in this earth ecosystem?

私が淡水のミジンコ類を飼育採集するにいたった経緯は、自宅で飼育する金魚、タナゴ類、メダカ等の稚仔魚の餌料生物として、ミジンコが適当であると考えたからであります。私が、ミジンコを中心にしたプランクトンを観察してきたのは大体20年位です。しばらくして、あまりの面白さに、『ミジンコ倶楽

部』などを結成し、10年ほど、そこらじゅうで「ミジンコだ」、「ミジンコですよ」、「ミジンコがいますよ」、などと叫んで歩いたわけですね。そうしたら、民百姓の諸君も面白がって、おまけにぞろぞろとミジンコの研究者が釣れた訳です。ま、釣れた連中をただりリリースするわけには参りません。腹の中にあるも

のを吐き出して頂いて、こちらは勉強する訳ですな。これが実に面白い。研究者の皆さんも、自分が日常やっていることをただ面白がって聞いてくれる人間がいたもんだから、ワーワーしゃべりまくる訳です。それはとても楽しいことでした。私は、確かに研究者ではありません。単なるミジンコ愛好家とでもいう人間です。ですが、研究者の人たちの仕事を一般の人間に判るように翻訳ができた、ということがことを面白くしたかもしれません。

そんな訳で、私がミジンコと付き合い気付いたことを以下に挙げます。

コップの中に宇宙が見えた

生きたミジンコをコップの中に入れて虫眼鏡で見ると、宇宙が見えた。そのことにいたく感動しました。毎日見ても飽きませんでした。はおーっと眺めているとその世界に吸い込まれていきました。ミジンコ、ケンミジンコ、ヒゲナガケンミジンコ、カイミジンコ、ワムシ、ツリガネムシ、ボルボックス、藻類、それらは光り輝いて小さな水の小宇宙の中を遊泳していました。

「わっ！ ミジンコだ！」

初めて生きたミジンコを顕微鏡で見たとき叫んだ言葉です。まったく当たり前の事実そのものの中に感動がありました。それは「ミジンコがミジンコをした」という厳粛な事実です。この「ミジンコ」のところを“人間”と置き換えてみると、何が厳粛な事実なのか判るかも知れません。私達は「人間として生まれ、人間として育ち、成熟し、人間として死んでいく。」このような過程が人生の理想とするならば、私たち人間は果たして人間をしているのでしょうか?!という、とんでもない命題にぶち当たります。コップの中は輝く命達が宇宙を遊泳していたのです。

命が透けて見えた

顕微鏡で見るとミジンコ（枝角類）の体は透けて見えます。心臓、血流、腸の中、育房内の卵、単眼、複眼、筋肉、脳、全てが見えるといっても過言でないでしょう。生きている体はどうなっているのかが丸見えでした。「命が透けて見える！」と感じました。ミジンコの体の構造など知ろうが知るまいが、見れば一目瞭然「あつと驚く為五郎」。ジーンとしびれました。こんな凄い生き物がいたとは。仰天でした。

ミジンコに愛は通じない

私の家では犬猫も飼っていましたし、ミジンコを餌として与える淡水魚や、サンショウウオなどがいました。今もいろいろいます。これらの生き物は自分で触ることが出来ます。そして、

飼い主の愛情に何らかの反応を示します。ですから自分の愛情を生き物に向かって注ぐことができる。ところがミジンコなどプランクトンレベルでは、最早自分の注いだ愛情を相手からの反応という形で感じ取ることはできません。淡水魚レベルでは、メダカのように警戒心の強いものでも餌をやり水槽に近づくと、水面近くで待ち構えています。

ミジンコ類も、夜、懐中電灯を水槽に当てると光の方に寄ってきますが、それは光に寄って来ているのであって、私に寄って来ているわけではありません。「ばーか」とか、「可愛いね」と言っても、今日もミジンコは知らん振りで。ミジンコには私たちが日常考えている愛は通じません。

ミジンコはミジンコの都合で生きている

ミジンコの生活史を見ると、単為生殖と両性生殖を棲息環境に合わせて使い分けています。ケンミジンコやヒゲナガケンミジンコのように常に両性生殖をする種類でも、棲息環境にあわせて急発卵と休眠卵を産み分けています。それぞれの種は、独自の生きるシステム、というか生活文化をもっています。それはそれぞれの都合であります。私がかでミジンコを飼育しながら感じたことは、この連中はこの連中の都合で生きているのだ、ということでした。そうか、この地球上のあらゆる種は、種の都合で生きているのだな。「家でミジンコを飼うということは、ミジンコの都合が判らねばいかん」ということでした。人間が人間中心主義の先端部分に科学や科学技術を置いてやってきたことの欠陥は、他の生物の都合を無視してきたことであろう。方程式の中の重大な係数を歪曲してしまった結果である。

命は互いに支えあいながら繋がっている

飼っている淡水魚たちも可愛いし、飼っているミジンコも可愛い。可愛いミジンコを可愛いタナゴの稚魚の水槽に入れると、稚魚たちは凄い勢いで食べる。

その光景を水槽に張り付いて虫眼鏡で見ていると胸が痛んだ。ミジンコを食べるタナゴの稚魚の口がジョーズの口に見えた。イノセントなミジンコはそのままジョーズの口の中に消えてしまったのである。あの命は何処へ行ったんだろう？ミジンコの命はタナゴの命になったのです。タナゴがイノセントでないかという、そうではありません。タナゴもまたイノセントなのです。ミジンコもまた植物プランクトンやバクテリアを食べています。もちろん、肉食性のミジンコ類もいます。水の中も陸上も、莫大な数の生き物が他の莫大な数の生物に支えられて存在しています。こういって美しい文章表現になりますが、その実態は食べる側は相手を殺して食べているのです。人間もちょっと前までは自分で殺して食べることをしていましたが、今やほとんどの人間が、生前の姿を知らないまま、おまけに自分の手で殺して食べなければならない辛さを省いて、気楽な生活をし

ています。これでは命のつながりなど何も感じないし判りもしない。

ミジンコの命と自分の命がどうつながっているかは、大変重大な問題です。実は、その魂と魂はつながっています。この宇宙の中では、生きとし生けるもの、形あるもので役割を持たないものは何一つとして存在しません。各個体は全体とつながっているのです。

生命は流れに浮かぶ泡沫のように、かつ消えかつ浮かびます。形あるものは気の速くなるような時間をかけてゆっくりと形を変えていきます。今日の文明社会が抱え込んでしまった全ての問題の根本原因はなんでしょうか。そのひとつは、私たち人間が生きていくのには莫大な数の生命が絶妙なバランスで作る世界が必要ですが、その生命に感謝する気持ちを忘れてしまったからではないでしょうか。生命だけではありません。太陽系、銀河系、大宇宙、それら全てが互いに全てを支えあっているのです。

今日の夕焼けが美しいのはどうしてか？

私が音楽でやってきたことは、自分の存在、そしてその奥にある魂を音に乗せることです。人間の命の有り様を自分と他人の関係の中で見つめ、人間を含む自然界や宇宙全体の中で見つ

めようとしてきました。特に、ミジンコの生きている姿から、「命とは何か」、「生きるとはどういうことなのか」、「死とは何か」、「死ぬるということは何が起るのか」を見つめることを通じて、感じたり考えたことは多大な影響力をもちました。

自分の音を磨き続けることは、楽器のコントロールができればいいというものではありません。コントロールして何を言うかが問題です。英語などの外国語が喋れても、究極は何を喋るかが問題であるのと同じです。日本語を喋って面白くない人がフランス語だと面白い、なんてことがあるでしょうか。言葉も楽器も単なる道具です。音楽もまた、生と死の間に浮かぶ泡沫のようなものです。

一人一人がミジンコを見たときに、その命の凄さに感動する。感動したとき、人は最も美しい顔をしています。突然の飛躍ですが、「今日の夕焼けが美しいのは、海にプランクトンがあふれ、湖沼にプランクトンがあふれているからなのです。」その何も言わない莫大な命の営みは、ただ黙って行われています。もの言わぬプランクトンはいつも立派にプランクトンしています。そのプランクトンの命によって支えられている私たちは、一体何をしているのでしょうか。

2002年6月29日受付, 2002年7月4日受理